

梅雨晴

永井荷風

青空文庫

森先生のしぶえちゆうさい渋江抽齋の伝を読んで、抽齋の一子やすよし優善なるものがその友と相あいはか謀つて父の蔵書を持ち出し、酒色の資となす記事に及んだ時、わたしは自らわが過去を顧みてざんかい慚悔の念に堪たえなかつた。

天保の世に抽齋の子のなした所は、明治の末にわたしの為したところとよく似ていた。抽齋の子は飛ひちよう蝶と名乗り寄席よせの高座に上つて身振声こわいろ色をつかい、また大川に舟を浮べて影絵芝居を演じた。わたしは朝寝坊夢楽という落語家の弟子となり夢之助と名乗つて前座ぜんざをつとめ、毎月師匠の持もちせき席の変るごとに、引幕を萌も黄えぎの大風呂敷おおふろしきに包んで背負つて歩いた。明治三十一、二年の頃の

ことなので、まだ電車はなかった。

当時のわたしを知っているものは井上唾々子いのうえあおばかりである。唾々子は今年六月のはじめ突然病に伏して、七月十一日の朝四十六歳を以て世を謝した。

二十年前わたしの唾々子における関係は、あたかも抽斎の子その友某におけると同じであった。

六月下旬の或日、めずらしく晴れた梅雨の空には、風も涼しく吹き通っていたのを幸さいわい、わたしは唾々子の病を東大久保西向にしむきてん天神じんの傍なるその齋居しゆうきよに問うた。枕元に有朋堂文庫本の

『先哲叢談』が投げ出されてあった。唾々子は英語の外に独逸語ドイツごにも通じていたが、晩年には専漢文もつぱらの書にのみ親しみ、現時文壇

の新作等には見向きだもせず、常にその言文一致の陋ろうなることを憤いきどおつていた。

わたしは抽斎伝の興味を説き、伝中に現れ来る蕩子とうしのわれらがむかしに似ていることを語つた。唾々子は既に形容けいよう枯槁ここうして一カ月前に見た時とは別人のようになつていたが、しかし談話はなお平生へいぜいと変りがなかつたので、夏の夕陽ゆうひの枕元にさし込んで来る頃ともまで俱ともに旧事を談じ合つた。内子ないしはわれわれの談話の奇怪に渉わたるのを知つてか後堂にかくれて姿を見せない。庭に飼つてある鶏えんが一羽縁えん先さきから病室へ上つて来て菓子鉢の中の菓子を啄つみかけたが、二人はそんな事にはかまわず話をつづけた。

わたしが昼間は外国語学校で支那語を学び、夜はないしよで寄

席へ通う頃、唾々子は第一高等学校の第一部第二年生で、既に初
の一カ年を校内の寄宿舎に送った後、飯田町三丁目麴の木坂下
向側の先考如苞翁の家から毎日のように一番町なるわたしの家
へ遊びに来た。ある晩、寄席が休みであつたことから考えると、
月の晦日であつたに相違ない。わたしは夕飯をすましてから唾々
子を訪おうと九段の坂を燈明台の下あたりまで降りて行くと、
下から大きなものを背負つて息を切らして上つて来る一人の男が
ある。電車の通らない頃の九段坂は今よりも峻しく、暗かったが、
片側の人家の灯で、大きなものを背負っている男の唾々子である
ことは、頤の突出たのと肩の聳えたのと、眼鏡をかけているのと
で、すぐに見定められた。

「おい、君、何を背負っているんだ。」と声をかけると、唾々子は即座に口をきく事のできなかつたほどうろたえた。横町よこちょうか路地でもあつたら背負つた物を置き捨てに逃げ出したかも知れない。

「君、引越してもするのか。」

この声の誰であるかを聞きわけて、唾々子は初めて安心したらしく、砂利の上に荷物を下したが、たちまち忽命令するような調子で、

「手伝いたまえ。ばかに重い。」

「何だ。」

「質屋だ。盗み出した。」

「そうか。えらい。」とわたしは手を拍うつた。唾々子は高等学校

に入ってから夙くも強酒を誇っていたが、しかしわたしともう一人島田という旧友との勧める悪事にはなかなか加担しなかった。然るにその夜突然この快挙に出でたのを見て、わたしは覚えぬ称揚の声を禁じ得なかったのだ。

「何の本だ。」ときくと、

「『通鑑』だ。」と唾々子は答えた。

「『通鑑』は『綱目』だろう。」

「そうさ。『綱目』でもやつとだ。『資治通鑑』が一人でかつげると思うか。」

「たいして貸しそうもないぜ。『通鑑』も『擘要』の方がいいのだろう。」

「これでも一晩位あそべるだろう。」

路傍にしゃがんで休みながらこんな話をした。その頃われわれが漢籍の種別とその価格とについて少しく知る所のあったのは、わたしと俱ともに支那語を学んでいた島田のおかげである。ここに少しく彼について言わなければならない。島田、名は翰かん、自ら元章と字あざなしていた。世に知られた宿儒こうそん篁村先生の次男で、われわれとは小学校からの友である。翰は一時神童といわれていた。われわれが漢文の教科書として『文章軌範』を読んでいた頃、翰は夙つとに唐宋諸家の中でも殊おうけいこうに王荊公の文を諳そらんじていたが、性質きよう驕きょう悍かんにして校則を守らず、漢文の外他の学課は悉く棄てて顧かえりみないので、試業の度ごとに落第をした結果、遂に学校でも持てあまし

て卒業証書を授与した。強^{こわもて}面に中学校を出たのは翰とわたしだけであろう。わたしの事はここに言わない。翰は平生手紙をかくにも、むずかしい漢文を用いて、同輩を困らせては喜んでいたが、それは他日大^{おおい}にわたしを裨益^{ひえき}する所となった。わたしは西洋文学の研究に倦^うんだ折々、目を支那文学に移し、殊に清初詩家の随筆^{しよとく}書牘^{しよとく}などを読もうとした時、さほどに苦しまずしてその意を解^たすることを得たのは今は既に世になき翰^たの賚^{たまもの}であると言わねばならない。

唾々子が『通鑑綱目』を持出した頃、翰もまたその家から折々書物を持出した。しかし翰の持出したものは、唾々子の持出した『通鑑』や『名所図会^{めいししよずえ}』、またわたしの持出した『群書類従』、

『史記評林』、山陽の『外史』、『政記』のたぐいとは異つて、皆珍書であつたそうである。先哲諸家の手写した抄本の中には容易に得がたいものもあつたとやら。後に聞けば島田家では蔵書の紛失に心づいてから市中の書肆しよしへ手を廻し絶えず買戻しをしていたというはなしである。

森先生の渋江抽斎の伝に、その子優善が持出した蔵書の一部が後年島田篁村翁の書庫に収められていた事が記されてある。もし翰が持出した珍書の中にむかし弘ひろさき前まへ医官渋江氏旧蔵のものが交まじつていたなら、世の中の事は都すべて廻り持であると言わなければならぬ。

明治四十一年わたしは海外より還かえつて再び島田を見た時、島田

は既に『古文旧書考』四巻の著者として、支那日本兩國の学界に重ぜられていた。いちじつ一 日島田はかつて爾汝じじよの友であつた唾々子とわたしとを新橋の一旗亭に招き、俳人にして集書家なる洒竹大しやちくおお野の氏をわれわれに紹介した。その時島田と大野氏とは北品川に住んでいる渋江氏が子孫の家には、なお珍書の存している事を語り、日を期してわたしにも同行を勧めた。されば渋江氏の蔵書家であつた事だけを知つたのは、わたしの方が森先生よりも時を早くしていたわけである。唾々子は二子と共に同行を約したが、その時のわたしには新刊の洋書より外には見たいものはなかつたので辞して行かなかつた。後三年を経ずして、わたしが少しく古文書について知らん事を欲した時、古書に精通した島田はそのため

に身を誤り既にこの世にはいなくなつたのであつた。

話は後へ戻る。その夜唾々子が運はこび出した『通鑑綱目』五十幾巻は、わたしも共に手伝つて、富士見町ふじみちようの大通から左へと一番町へ曲る角から二、三軒目に、篠田という軒けん燈とうを出した質屋の店先へかつぎ込まれた。

わたしがこの質屋の顧客となつた来歴は家へ出入する車屋の女房に頼んで内ないしよ所しよでその通帳を貸してもらつたからで。それから唾々子と島田とがつづいて暖簾のれんをくぐるようになったのである。

もうそろそろ夜風の寒くなりかけた頃の晦日みそかであつたが、日が暮れたばかりのせいか、格子戸内の土間どまには客は一人もいず、鉄の棒で境をした畳の上には、いつも見馴れた三十前後の顔色のわ

るい病身らしい番頭が小僧に衣類をたたませている。われわれは

ひとまず

一 先土間へ下した書物の包をば、よいしよと覚えず声を掛けて

畳の方へと引摺り上げるまで番頭はだまつて知らぬ顔をしている。

ひきず

引摺り上げる時風呂敷の間から、その結むすびめ目を解くにも及ばず、

書物が五、六冊畳の上へくずれ出したので、わたしは無造作むぞうさに、

「君、拾円貸したまえ。」

番頭は例の如くわれわれをあくまで仕様のない坊ちゃんだとうように、にやにや笑いながら、「駄目ですよ。いくらにもなりませんよ。」

「まあ、君、何冊あるか調べてから値をつけたまえ。」

「揃っていても駄目ですよ。全くのはなし、他のお客様ならお断

りするんですが……。」

「一体いくらだよ。そんな意地の悪いことを言わないで。」

「そうですね。まア弐円がせいぜいという処でしょう。」

わたしと唾々子とは、最初拾円と大きく切出して置けば結局半分より安くなることはあるまいと思っていたので、暫く顔を見合せたまま何とも言う事ができなかった。殊に唾々子はこの夜この事を敢てするに至るまでの良心の苦痛と、途中人目を憚りつつ背負つて来たその労力とが、合せて僅弐円わずかにしかならないと聞いては、がっかりするのも無理はない。口に啣くわえた巻煙草のパイレートに火をつけることも忘れていたが、良久ややあつて、

「おい。お願いだからもうすこし貸してくれ。」

「この次、きつと入れ合せをするよ。」とわたしもとても歎願した。

しかし『通鑑綱目』は二人がそれから半時間あまりも口を揃えて番頭を攻めつけたにかかわらず、結局わずか五拾銭値上げをされたに過ぎなかった。

「これっばかりじゃ、どうにもならない。」

「これじゃ新宿へ行つても駄目だ。」

質屋の店を出て、二人は嘆息しながら表通を招魂社しょうこんしゃの鳥居の方へと歩いて行つた。万源という料理屋の二階から酔客の放歌が聞える。二人は何というわけとも知らず、その方へと歩み寄つたが、その時わたしはふと気がついて唾々子の袖を引いた。万源

の向側なる芸者家新道のまがりかど曲角に煙草屋がある。主人は近辺の
 差配で金も貸しているという。わたしの家をよく知っているから、
 五円や拾円貸さないことはあるまい。しかし何と言つて借りたら
 いいものだろう。

すると唾々子は暫く黙考していたが、「友達が吉原から馬を引
 いて来た。友達がかわいそうだから、急場のところ、何とか都合
 をしてくれと頼んで見たまえ。」

「そうか。やって見よう。」とわたしは唾々子をその場に待たせ
 て、まず冠つていた鳥打帽とりうちぼうを懐中にかくし、いかにも狼狽した
 風で、煙草屋の店先へ駈付けるが否や、

「今晚は。急に御願ひがあるんですが。」

帽子をかくしたのは友達がわたしの家へ馬をつれて来たので、わたしは家人の手前を憚り、取るものも取り敢ず救を求めに来た如く見せかけようとしたのである。

事は直に成った。二人は意気揚々として九段坂を下り車を北廓に飛した。

腕車わんしゃと肩輿けんよと物は既に異つているが、昔も今も、放蕩の子のなすところに変りはない。蕩子のその醜行を蔽うに詩文の美を借来らん事を欲するのも古今また同じである。揚州十年の痴夢ちむより一覚する時、羸かち得るものは青楼薄倖せいろうの名より他には何物もない。病床の談話はたまたま樊川はんせんの詩を言うに及んでここに尽きた。

縁側から上つて来た鶏は人の追わざるに再び庭に下りて頻しきりに友を呼んでゐる。日暮の餌をあさる鶏には、菓子鉢の菓子は甘すぎたのであろう。

唾々子は既にこの世にいない。その俳句文章には誦しょうすべきものが尠すくなくない。子は別に不願醒客と号した。白氏の自ら醉吟先生といつたのに倣ならつたのであろうか。子の著『猿論語』、『酒行脚』、『裏店列伝』、『烏牙庵漫筆』、『皆醉中に筆を駆かつたものである。

わたしは子の遺稿を再読して世にこれを紹介する機会のあらんことを望んでゐる。

大正十二年七月稿

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一～五」岩波書店

1981（昭和56）年11月～1982（昭和57）年3月

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月9日作成

2011年1月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

梅雨晴

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>